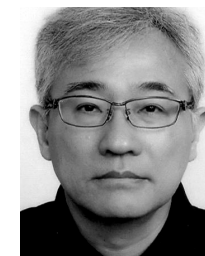


コラム1

これからのモビリティーズに向けて 自転車への注目と通信への期待



立教大学社会学部メディア社会学科教授 是永 論

「モビリティ」という語は交通や移動に関する新たな概念を示すことばとして、近年自動車業界などで多用されているが、社会学における「モビリティーズ」とは、主にグローバルな移動を焦点に、社会生活が営まれる空間のあり方を問い直す概念として広く位置づけられるものである¹。ここでは自転車を手がかりに、より身近な生活環境についてのモビリティーズを考える。

「社会的インフラ」としての地域生活圏

近年の少子化と高齢化を背景に、「コンパクトなまちづくり」や「地域生活圏」といった政策が提唱されている。これは都市郊外に拡散した施設や都市機能を改め、中心市街地に集約された生活圏を、デジタル技術の活用の上で築くという構想である。その効果は医療・災害対策から地域経済の維持、環境問題への対応など多岐にわたるが、ここに「社会的インフラ」²という独自の観点を加えると、その効果はさらに人間関係にも波及することが期待される。社会的インフラとは、図書館など、地域での人びとの協調関係を自然に育成する可能性を持つもので、社会の孤立化を防ぐ手

だてとなる。直接にコミュニティとしての人間関係を形成することよりも、「集まる場所」を形成してオープンな交流のきっかけを作ることが社会的インフラの特徴である。

自転車への注目と通信への期待

そこで注目したいのが、自転車による移動である。子どもの頃に自転車を使った経験があればわかるように、自転車は年齢を問わない手軽な移動手段であるだけでなく、好きな時に好きな場所に立ち寄ったり、気軽に人が集まることを容易にする。自然との交流を含む、人びとの多様性にしがたったオープンな生活空間の形成を可能にする点で、自転車には独自のモビリティーズが見出されており、実際に欧米では専用道の延長も積極的に推進されている。

日本でも近年、法律の制定で自転車利用の推進がはかられているものの、道路事情や用地などの問題で十分な可能性を発揮できないのが現状である。また、女性を中心に最近10年間の自転車の保有率が下がっているというデータ³もある。

そこで期待されるのが、通信技術によるサポートだ。

スマートフォン・アプリで手軽に利用できるシェア・サイクルのさらなる拡大のほか、高低差や交通量などから自転車移動に適したナビゲーションを行うシステム、独自のSNSによる身近な立ち寄りスポットやイベント情報の相互提供など、通信技術が新たなモビリティーズの展開を促進し、独自の社会的インフラを形成する機会としても、自転車のサポートは意義の大きな対象となるだろう。

注-----

- 1 吉原直樹『モビリティーズ・スタディーズ』ミネルヴァ書房、2022年
- 2 E.クリネンバーグ(藤原朝子訳)『集まる場所が必要だ：孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版、2021年
- 3 是永 論「自転車「ヘルメット」努力義務化で注目も そもそも保有率ダダ下がるの現実、まずは専用道路の整備急げ」、『メルクマール』2023年5月15日付記事 <https://merkmal-biz.jp/post/38316>